

胃にもたれず薬効良し

少量で血和まし

愁消す



ホソバオケラ。根茎を白求(ビクジュツ)。健胃、利水作用、筋肉を丈夫にする作用がある。

「お神酒あがらぬ神はない」と歌われているように、わが国も神代の昔から神事は特に酒とのかかわりが深いようだ。怪物の八岐大蛇(やまたのおろち)も、八つのカメの酒を飲み過ぎて退治された。素戔嗚尊(すさのおのみこと)が日本一の強力のお方でも酒の力が必要だったわけだ。  
ところで、酒で服(の)む漢方薬もある。昨年八月二十三日付の本欄の「八味丸」は、酒服せよ、すなわち少量の日本酒で服むと胃にもたれず薬効がよいと指示してある。「当归芍薬散末(とうきしやくやくさんまつ)」もさかずき一杯の酒でねって、ぬるま湯でとがして服むと効果がよいとされている。ただし、酒の飲める

人の話で無理することはない。漢方原料に手を加える手法を「修治」といって、しばしば利用されるアカヤジオウの根「地黄」は酒に浸したり、酒で蒸しなさいと指示している。頻繁に用いる「唐大黄(からだいおう)」は、日本酒に浸して乾燥後に用いると、便通をつける働き作用が穏やかである。大なり小なり漢方薬はお酒のおかげをこうもっている。  
古代中国では「醴(れい)」といって頑固な病に用いられた薬があった。この醴が実は薬用酒なのである。明代の博物学者、李時珍という人は二十五年の歳月を費やし、五十六卷に及ぶ「本草綱目(ほんぞうこうもく)」という博物学書を残した。この中に七十種近い醴の処方がある。酒自体が温薬であるし、彼は、「酒は少量で血を和まし、気をめぐらし、愁を消す」と書いている。かぜをひきやすい方は、本欄十二月八日付の「十全大補湯(じゅうぜんだいはとう)」などを服用酒として、夏ごろから服んでおくとよい。この薬は「四

物湯(しもつとう)と苓桂朮甘湯(りょうけいじゆつかんとう)」と合わせ人参と黄耆(おうぎ)を加えてあり、十種の混合剤。  
四物湯は血虚の薬で血液のパワーのない人に、苓桂朮甘湯は水毒の薬で水の偏りによるふらつきやメニエル氏症候群、動悸(どうき)などの症状がある人に使う。人参は悪いところを正常化するとともに免疫力も高める。黄耆は体表面や粘膜の組織を正常化する。従ってぶよぶよ太りの体表も引き締める。  
筆者はこの処方で「肺気腫(しゅ)」の方に大変喜ばれた数例を持っている。  
十全大補湯生薬の十日分を一、八のホワイトリカーに入れると、半年ぐらいで服める。もちろん、氷砂糖少々で甘みを調整し、体にあつた濃度に薄めて、毎夕食前にさかずき一杯を服むとよい。今なら夏に間に合う。